

施設長報告

物質構造科学研究所 若槻 壮市

昨年のPFシンポ以降 2009 年度はPF2. 5GeVリングのトップアップ運転の導入、BL1A(ターゲットタンパク)、BL13A(有機機能性物質)、BL14C(イメージング)、BL16A(可変偏光軟X線分光)、BL18B(インド)、NE3A(アステラス)、NE7A(高圧)の建設・整備、UG運営ST、教育用BLという新システムの導入など、PF、PF-ARの大学共同利用を推進してきました。加えて、光源研究系の加速器研究施設との融合、KEK-Xプロジェクトの導入、cERLの建設準備とERLサイエンスの検討など大きな動きがありました。また、昨年 11 月の行政刷新会議の事業仕分けWGでは国立大学、大学共同利用機関の運営費交付金が仕分け対象となり特別教育研究経費は「削減」という結論が出されました。SPring-8 やターゲットタンパクなど個別に事業仕分け対象となった場合と違い、特別教育研究経費は国立大学、大学共同利用機関全体が対象なため、プロジェクト経費をもとに運営しているフォトンファクトリーは、明確な形での仕分け対象とはならず対応が難しいところがありました。結果として放射光プロジェクト経費は約 3%の減額となりました。最終的な予算は KEKB(8GeV 入射)の運転時間短縮により、放射光のみ運転(3GeV 入射)をした時の電気代の節減、放射光将来プロジェクトとPF、PF-ARの維持・改良・共同利用とのバランスを考慮して決められることとなります。H22 年度放射光プロジェクト予算が3%も減った理由は明確にはされていませんが、一つの可能性として、従来から指摘されているビームタイム配分が競争的な環境にないという点があった可能性があります。プロジェクト経費のすべてをPFの運転・改良に使えるわけでないところから、プロジェクト経費の減少分以上の多大な影響がでる可能性もあります。このため、PFでは、大学の研究基盤としての放射光の重要性を訴えながら、萌芽的研究に十分なビームタイムを確保しつつ、より競争的な環境を作っていくという課題に迅速に取り組む必要があります。今回のPFシンポでは 1 月 6 日のPFユーザーとの集いに引き続き、競争的なビームタイム配分とE型課題等についての議論を継続して行いたいと思います。

将来計画について KEK では cERL、KEK-X、5GeV クラス ERL という 3 段階で進めていますが、その中でコンパクト ERL 計画について昨年 4 月の光源研究系と加速器研究施設融合以来、特に電子銃の開発を強化しながら要素技術の開発を進めるとともに cERL 設置場所として東カウンターホールの整備をしています。現在、2012 年度中に 35MeV で周回部まで完成し、速やかに ERL ビームを出せるよう全体計画を加速する方針を検討していますが、PF、PF-AR の運転・共同利用も続けながら cERL 開発、さらには KEK-X・ERL 計画も推進していくためにマンパワー、予算の配分等にかかりの配慮が必要となります。

今回のPFシンポは SSRL の Herman Winick 教授、リボソームの構造解析で 2009 年ノーベル化学賞を受賞したワイツマン研究所の Ada Yonath 教授に特別講演をお願いしています。初日午後には文部科学省ご来賓のご挨拶と機構長によるお話もあり、充実したセッションとなると期待しています。招待講演、ポスターセッション、PF懇談会総会、施設報告、PF運営についての意見交換等で、PFを使っただけでなく、施設運営・共同利用、将来計画についてユーザーの方々と広く議論させていただきたいと思います。